



集 歌
歌 の 櫻 山

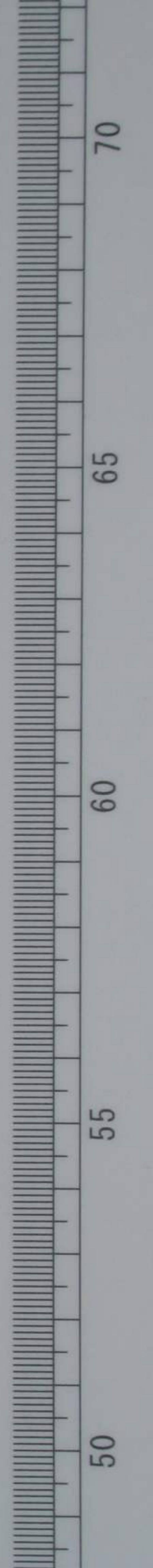
著 水 牧 山 若



Kipune

1923

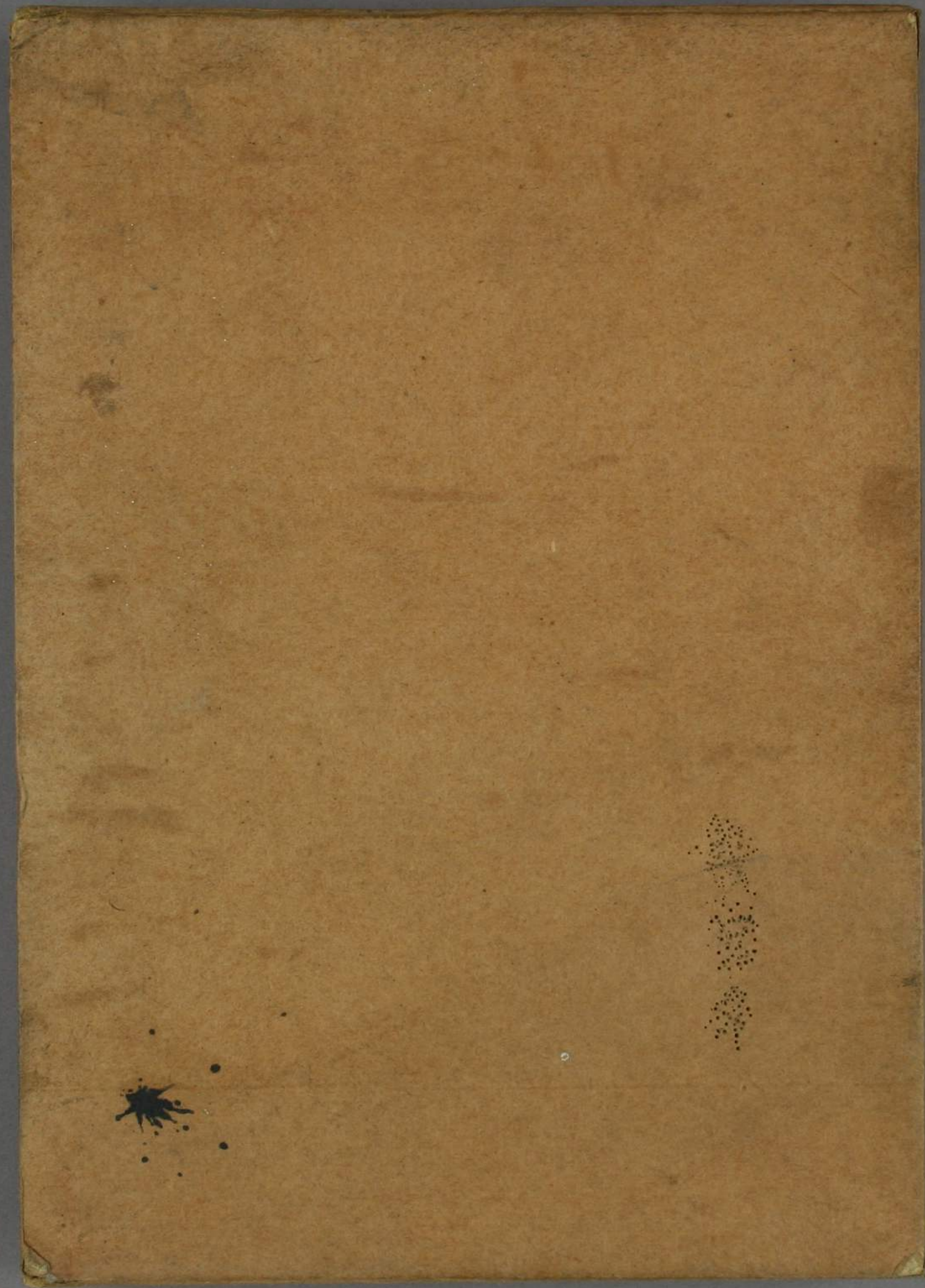
版 出 社 潮 新



集歌

山櫻の歌

若山牧水著



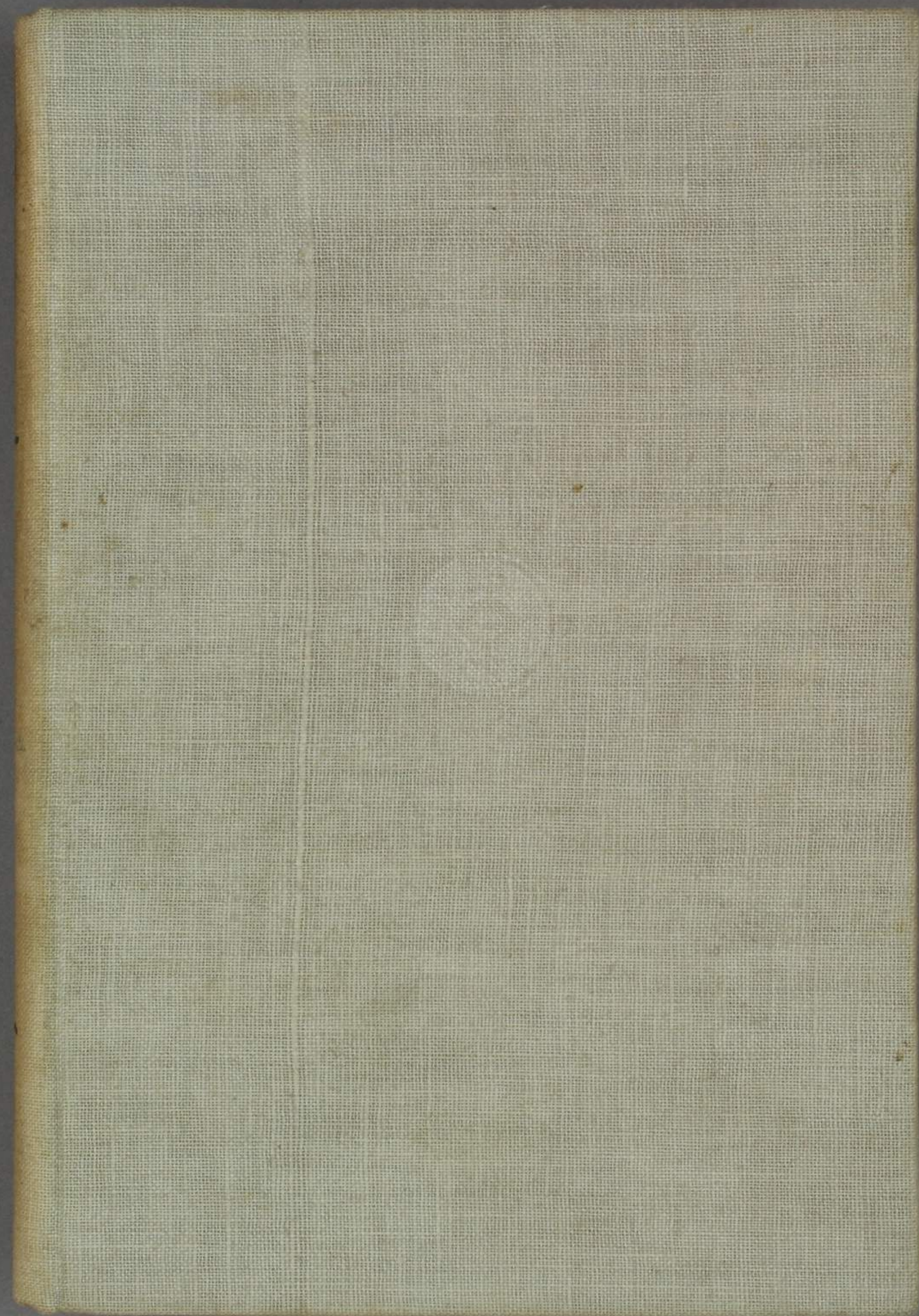


山櫻の歌



山櫻の歌

若山叔小著

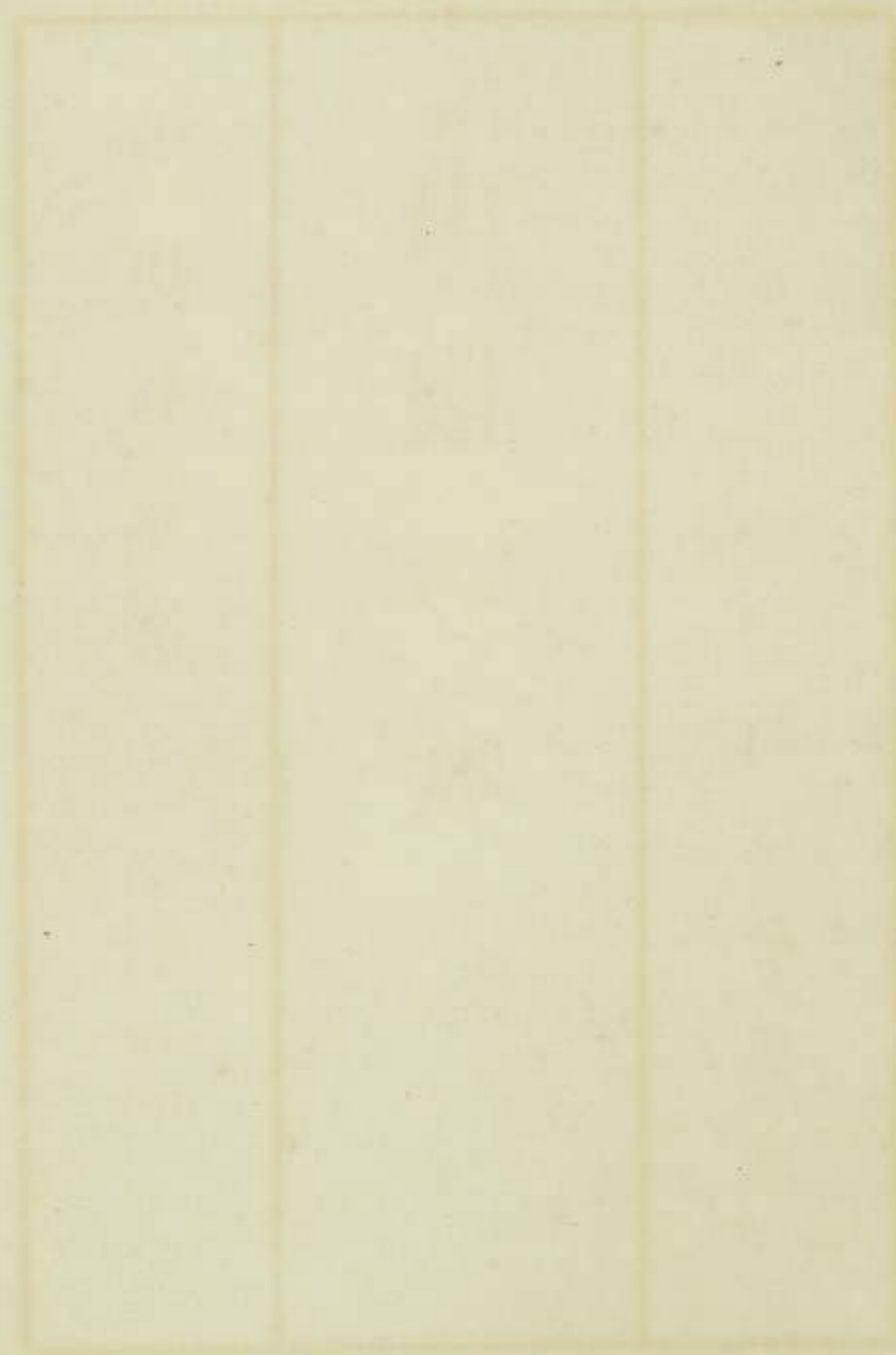




若山牧水著

山櫻の歌

新潮社出版







序

本書は先著『くろ土』(大正十年三月發行)に次ぐもので、大正十年正月より同十一年十二月に到るまで全二年間に詠んだ歌が収めてある。

序文としていま書き度い事は、おほかた『くろ土』の序文に書いたことと變らないので、勢ひそれを繰返すわけになる。故に此處には省くことにした。ただ本書を讀んで多少とも感興を覺えられた人には併せて『くろ土』をも讀んでほしいといふことを書いておき度い。著者が一生の歩みの續きといふうちにも『くろ土』の頃から本書にか

けての五六年の間には特に離しがたい因縁が結ばれてゐるやうに思はれるからである。

なほこれは書かでもの事かともおもふが、氣づいたままに書きつけておく。假に動的の歌と靜的の歌といふものがあるとするならば『くろ土』は、動の方で本書の歌は靜的のものであるらしく感ぜらるるのだ。これはこの二冊に限らず、今までに出して來た歌集十數冊(本書が第十四冊目に當る)を振返つて見ると、その間にこの二つの交替が知らず／＼繰返されて來てゐるやうに思はるのである。即ち或る期間頻りに主觀味の勝つた歌を詠んでゐたとすれば、(それを假に動的の歌と呼んだ)その次ぎにはなるたけそれから離れた、靜かなものが詠みたくなる、そしてその入れ替らうとする場合に一冊に纏

めておきたい心が起る、といふのではなからうかと不圖考へられたのである。どうして斯うなるか、たださうした一つの詠みぶりに倦んでさうなるのか、それとも他に何か理由があるか、それは自分にも解らぬ。

この三月十日、本書の原稿を持つて上京し神田の友人の許に泊つた。翌朝朝酒一杯の後縁側の柱に凭れてゐる處を寫眞好の友人が撮影した。口繪にしてあるのはその寫眞である。

大正十二年四月廿一日、葉櫻に雨こまかき日、沼津
在の寓居にて、

若 山 牧 水

山櫻の歌目次

大正十年

野	火	三
雪	川	五
叢	音	六
雲	雀	九
冬	遣	一〇
雑	詠	一二

1

温泉宿の庭	雑詠	夏の富士	庭の畑	疲勞	こもり	夏の雨	草花	或る朝	梅雨晴
.....
五五	五〇	四八	四六	四四	四二	四〇	三七	三六	三四

梅雨	病み易くて	吾子富士人	河鹿	小松原	庭	躑躅	櫻と雀	櫻と鶺鴒	櫻と蜻蛉
.....
三三	三一	二九	二七	二四	二二	二一	二〇	一八	一六

裾野村……………五六
 鶴嶋と河鹿……………五九
 夜の蟬……………六一
 秋近し……………六一
 大野原の秋……………六四
 茅萱が原……………六七
 東京まで……………六八
 白骨温泉……………七〇
 上高地附近……………七三
 燒嶽頂上……………七五

原始林……………七七
 野口の築……………七九
 惠那曇……………八一
 百舌鳥と鮎……………八二
 小鳥籠……………八五
 煙草……………八六
 夕日と食欲……………八八
 雑詠……………九〇
 入江の冬……………九二
 伊豆石山……………九八

静かなれ心……………一〇一

大正十一年

土肥温泉にて……………一〇七

梅の花……………一一七

とある酒場にて……………一九

山ざくら……………一二一

富士の歌……………一二七

湯ヶ島雑詠……………一二九

井手の鮎子……………一三九

大御姿……………一四一

大野原の初夏……………一四四

みじか夜……………一五一

馬追蟲……………一五二

木槿の花……………一五三

雑詠……………一五五

畑毛温泉にて……………一五八

尾張犬山城……………一六五

紅葉の歌……………一六七

啄木鳥と鷹……………一七〇

枯野の落栗……………一七四
 山の歌溪の歌……………一八一
 落葉と龍膽の花……………一八五
 雪の歌……………一八八
 鴨鳥の歌……………一九一
 中禪寺湖にて……………一九八
 鳴蟲山の鹿……………二〇〇
 飲食雜詠……………二〇三
 命を惜しむ歌……………二〇八
 冬風……………二二二

山櫻の歌目次終

友をおもふ歌……………二二四

大正十年

野 火

野の空に立つ煙のかげに燃え入りて色さびはてし晝の
野火かも（その一）

おほらけき箱根の山の萱枯れてさびぬる野邊を焼
ける火のみゆ

3
野の火の火の遠見はさびしうちわたす枯田のなかの
道をゆきつつ

冴^さえかへり寒^{さむ}けき今日^{けふ}のうらら日に野^の火^びの煙^{けむり}のた
なびける見^みゆ

うば玉^{たま}の夜^よ空^{ぞら}の間に油^{あぶら}火^びのごとき野^の火^び見^みえ寒^{さむ}き風^{かぜ}
吹^ふく(その二)

ちりぢりに燃^もゆるはさびし鳥^う羽^は玉^{たま}の夜^よ空^{ぞら}のやみに
見^みえわたる野^の火^び

里^{さと}人^{びと}のはなてる野^の火^びは遠^{とほ}空^{ぞら}の間にわびしく燃^もえひ
ろごれり

幼^こくて見^みしふる里^{さと}の春^{はる}の野^の忘^{わす}れかねて野^の火^びは
見^みるなり

雪 解 川

たまたまに出^いて來^きてわたる狩^か野^の川^{がは}の水^{みづ}は張^はりたり
雪^{ゆき}解^げ日^ひ和^なに

假^{かり}橋^{はし}をわたれば寒^{さむ}き風^{かぜ}吹^ふくや雪^{ゆき}解^げの川^{がは}の水^{みづ}みなぎ
りて

風 橋 錢 を は ら ひ て わ た る 假 橋 の 板 あ や ふ く て 寒 き 春

箴 の 音

か す か な る 羽 蟲 ま ひ を り 窓 の さ さ け ぶ ら ふ 春 の 日
ざ し の な か に

畑 中 の 草 に う ご け る 風 あ り て け ふ 春 の 日 の う ら ら
け き か も

か ぎ ろ ひ の 昇 り を る み ゆ 白 菜 の 摘 み の こ さ れ し 庭
の 畑 に

窓 下 の 霜 の 畑 に か ぎ ろ ひ の た つ 日 を き こ ゆ 隣 家 の
機 は

藁 屋 根 の 軒 端 を ぐ ら き 北 窓 に 起 り ゐ て 澄 め り そ の
箴 の 音 は

わ が 畑 の さ さ き の 藁 屋 根 い ぶ せ き に そ の 家 の 妻 は 機
織 り い そ ぐ

窓あけて見てをれば畑のま向ひの家いへに織おる機はたいよ
いよきこゆ

畑はた為し事こといまをすくなみ百姓ひやくしやうの妻つまが織おる機はたひすがら
きこゆ

はるかなる聲こゑにしきこゆ庭にわにいてて呼よびかはしあ
そぶ妻子つまこが聲こゑは

庭にわさきの屋敷やしき畑はたけにかぎろひののぼるを一日ひとひ見みつ
さびしき

雲 雀

翔たひのぼり空そらの光ひかりにかぎろひて啼なき入いれる雲雀ひばり聞き
けばかなしも(そのこ)

かそけくも影かげぞ見みえたる大空おほそらのひかりのなかに啼な
ける雲雀ひばりは

天あまつ日ひにひかりかぎろひこまやかに羽根はねふるはせ
て啼なく雲雀ひばり見みゆ

東風吹くや空にむらだつ白雲の今朝のしげきに雲雀なくなり（その二）

おほどかに空にうごける白雲の曇れる蔭に雲雀啼くなり

冬拾遺

時雨空小ぐらきかたにうかびたる富士の深雪のいろ澄めるかな

門入れば庭の楓の散紅葉さびしくもあるか町のかへりに

障子さし電燈ともしこの朝を部屋にこもればよき時雨かな

降りふらぬ寒き時雨の朝をいでて庭の落葉を見つたのしき

わが門ゆ眺むる富士は大方は見つくしたれどいよよ飽かぬかも

愛鷹あしたかにおほ雪降ゆきふれり百ひゃく璧ひたの眞まくろき森もりを降ふり埋うみ
つ　つ

この煙草たばこ味あじのにがきはわが心こころおちぬ故ゆゑか朝あさのひ
なたに

雜　　詠

山やまの蔭かげ此處こゝの入江いりえの奥おくまりに小波こなみよせて梅うめの花はな咲さ
けり(江の浦)

笠かさなりのわが呼よぶ雲くもの笠雲かさぐもは富士ふじの上うへの空そらに三みつつ
懸かりたり

砂丘すなのなぞへの畑はたの瘦やせ麥むぎのほそき畝うねより啼なきた
つ雲雀うずはり　(田子の浦)

梅うめの花はな散ちりうかびたる池いけの面おもてに降ふりしきる雨あめは音ね
を亂みださぬ(吐月峯庵)

海鳥うみどりの風かぜにさからふ一ひとならび一ひと羽はくづれてみなく
づれたり(静浦三首)

向つ 國伊豆の山邊も見えわかぬ入江の霞わけて漕
ぐ舟

わがゆくやかがやく砂の白砂の濱の長手にかぎろ
ひの燃ゆ

庭さきの一もと蜜柑春の日のかぎろふなかに實を
たらしたり

頬かむり冠りて縁にももの縫へる妻がうしろでを親
しとし見つ (縁側三首)

もぎとりていまだ露けき椎茸を買へと持て來ぬ春
日の縁に

庭さきの籬根のむかひゆく人にさゆるる日影かぎ
ろひて見ゆ

霞みあふ空のひかりに籠らひていろさびはてし富
士の白雪

をちこちに野火の煙のけぶりあひてかすめる空の
富士の高山

入海の向つ國山春たけてあをみわたれる伊豆の國
山（靜浦）

櫻と蝸

夕霽暮れおそきけふの春の日の空のしめりに櫻咲
きたり

雨過ぎししめりのなかにわが庭の櫻しばらく散ら
であるかな

さくら花まさかりのころを降りつぎし雨あがる見
えて海の鳴るなり

さくら花褪せ咲けるみゆめづらしくこよひを蝸
の鳴ける夕に

蝸の鳴く聲めづらしき春の夜のものしめりは
部屋をこめたり

蝸の鳴く戶外のしめりおもはるる今宵の灯影あ
さらけさかな

ひとところあけおく窓ゆかよひ来て灯かけにうごく
春の夜の風

櫻 と 鶉

ひややけき風をよろしみ窓あけて見てをれば櫻し
じに散りまふ
春の日のひかりのなかにつぎつぎに散りまふ櫻か
がやきて散る

蠶豆のはたけの花の久しきに散りかかりたりさく
らの花は

庭くまの落葉の上に散りたまりさくら白きに鶉來
てをる

朽葉なす鶉の腹のいろさびて歩めるあはれわが見
てをるに

櫻 と 雀

雀子の啼く聲しげしこの朝明ふりいでし雨はとほ
り雨ならむ

散りのこる梢の櫻雨すぎしこの朝照にちりいそぐ
かも

けふあたり名残と思ふはなびらの櫻ほの白く散り
まへる見ゆ

散りたまる樋の櫻のまひ立つや雀たはむれ其處に
あそぶに

わが借りて住へる家の古ければ多き雀子朝夕にな
く

鹽 釜 櫻

曉の明けやらぬ闇にふりいでし雨を見てをり夜爲
事を終へ

ゆ うすれゆく曉闇にあめ降りて鹽竈櫻さむけくぞみ

ひともとの稚木のさくらしほがまの八重咲く花の
咲きしだれたり

稚木なる枝をみじかみたわに咲きかたまれる
鹽竈櫻

庭

わが小犬あそびどころとあそびをる庭の芝生にわ
れも出てたり

数あらぬ庭木をわたる春風のとよみてきこゆわが
立ち寄れば

桃さくら咲きつぐなかにわが庭の松のしん白く仲
びそろひたり

庭に出でてみるわが部屋のうち暗く冷たきさまの
なつかしきかな

雲雀なく空の青みのけぶらひて心うら悲し庭に立
ちつつ

庭先の松のしげみに立ちてゐて聞くとしもなき鶯
のこゑ

わが門を流るる溝のみぎはなる藪にこもりてうぐ
ひすの啼く

小松原

川向ひつづきはるけき野の窪の小松が原に霞たち
たり（その一）

おほどかに傾斜つくれる小松原小松のしんは伸び
そろひたり

川向ひ小松が原の廣原にこもりゐてうたふ唄聲き
こゆ

松原の廣さに起りひとところ動かぬ唄をききて久
しき

松原の廣さがなかに立ちまじる雑木の若葉けぶら
ひてみゆ

鶯は巢のそば去らず啼く鳥の啼きてこもれり小松
が原に（その二）

松原のはしの岩山岩が根の裂目をつづる丹つつじ
の花

ところどころ岩あらはなる山窪の小松が原にうぐ
ひすの啼く

伸びそろふ小松のしんのほの白くけぶらふ原にう
ぐひすの啼く

河 鹿

丸木橋しめりあやふき曙にわがわたりゆけば河鹿
なくなり（湯ヶ島にて）

水際なる岩のしめりのまだ深きこの曙を河鹿なく
なり

山魚釣ると人身を臥せて這ひてをる岩の上なる山
櫻花

溪^{たに}ばたの湯槽^{ゆざ}にをりて玻^は璃^り窓^{まど}のうるほふみれば朝^あ明^あくるなり

水^{みづ}上の峽^{せき}間^まを深^{ふか}くとざしたる雲^{くも}はうごかて朝^ああけむとす

檜^ひの葉^はぞしげり垂^たりたる瀬^せの音^ねは其^そ處^こにおこりて部^べ屋^やにかよふなり

溪^{たに}ばたの檜^ひのかがやきふかみつつわびしき春^{はる}の晝^{ひる}となりゆく

溪^{たに}端^{はた}の浅^{あさ}き木^こ立^{たち}の椿^{つばき}の花^{はな}ちりのこりゐて河^か鹿^{じか}なくなり

吾子富士人

四月廿六日次男誕生、富士人と名づく、今までになき可愛ゆさを覺ゆるも早や父となりはてし心からにや。

春^{はる}の夜^よの曉^{あけつき}かけてさし昇^{のぼ}る月^{つき}にかすめり香^か貫^{ぬき}の山^{やま}は(その一、産婆をよびに)

麥の穂にをりをりさはりゆく路に月のさしゐてこころかなしも

生れ来てけふ三日を経つ目鼻立そろへるみれば抱かむとぞおもふ (その二)

抱貧しくてもはやなさじとおもひたる四人目の子を抱けばかはゆき

兄ひとり姉のふたりに増すとさへ思はれてこの子いとしかりけり

守吾子いまし睡入るとすらし泣聲のかすけくなりて唄きこゆ

四人をる吾子のなかなるすゑの子のみづごかはゆしわが年ゆゑに (その三)

四人目の末のみづごのとりわけてかはゆしおのれ病みがちにしてい

病み易くて

年月のつかれ出て来てわが病めば咲きてあざやけ
き夏草の花(その一)

つぎつぎに病みてしをれば家ごもり庭掃きくらす
草花を植ゑ

むしあつき梅雨あがり日を風邪ひきて汗ながしつ
つ庭木見てをる(その二)

かりそめに冷えしとおもふたちまちに風邪ひきて
こころ寒けかりけり

汗くさき風邪の床出て庭先の花に水やる咳きむせ
びつつ

雨土用と今年いふべき雨おほき夏をこもりて風邪
ひきくらす

梅 雨

生垣に木がくりみゆる門さきの田植の人に雨のふ
るなり

雨あめいよよふれば田た植ううる人ひと人びとの寄よりきていこふわ
が門かどの木きに

さやさやと音ねたてて來こし雨あめ脚あしのいま降ふりかかる窓まど
さきの木きに

梅つばき雨あめふるや瓶かみに挿させればくれなるのしみじみ深ふかき
ダアリヤの花はな

梅 雨 晴

うす日ひさす梅つばき雨あめの晴はれ間まに鳴なく蟲むしの澄すみぬるこゑは
庭にわに起おれり

雨あめ雲ぐもの低ひくわたりて庭にわさきの草くさむらあをみ夏なつ蟲むしぞ
鳴なく

一ひと重へ咲さきダリヤの花はなのくれなるの澄すみぬるかなや梅つばき
雨あめばれの風かぜに

真ま白しろくぞ夏なつ萩はぎ咲さきぬさみだれのいまだ降ふるべき庭にわ
のしめりに

雀すずめとると飽あかぬ仔こ犬いぬがたくらみの小こ走はしりをかし梅うめ
雨あめの晴はれ間まを

或る朝

この朝あさを事ことあるらしき燕つばきのさへづりきこゆ庭にわ木きの
風かぜに

苔こけのうへ這はひゆく蟻ありに心こころとまるこのわびしさのな
ほ深ふかめかし

あつたちつわびしき時ときは軒のき下したの鶏とりに餌えさをやり親したし
む事ことす

わが門かどのまへうちわたす狭さ青あお田だのはるけきかたに
田た草くさとるみゆ

草花

橋はしこえて入いるわが門かどの庭にわ路みちに植うゑならべたるコス
モスの苗なへ

コスモスの茂りなびかひ伸ぶみれば花は咲かずも
よしとしおもふ

借り住ふふるき邸のくまぐまのすたれし園に時の
花咲く

時くれば咲きつぐ花を八重むぐら荒れたる庭に見
つつ樂しき

居てみるやならびて咲ける草花の色香とりどりに
飽く花ぞなき

目に見えて肥料利きゆく夏の日の園の草花咲きそ
めにけり

朝夕に咲きつぐ園の草花を朝見ゆふべ見こころ飽
かなく

いま咲くは色香深かる草花のいのちみじかき夏草
の花

泡雪のましろく咲きて莖につく鳳仙花のはなの葉
ごもりぞよき

雪なせる白きをみれば鳳仙花咲き競ふ色のこれに
如かめや

朝夕につちかふ土の黒み来て鳳仙花のはな散りそ
めにけり

鳳仙花いろとりどりに取り置かむ種を選ぶとしめ
むすぶなり

夏の雨

飯かしぐゆふべの煙庭に這ひてあきらけき夏の雨
は降るなり(その一)

はちはちと降りはじけつつ荒庭の穂草がうへに雨
は降るなり

にはか雨降りしくところ庭草の高きみじかき伏し
みだれたり(その二)

澁柿のくろみ茂れるひともとに瀧なして降るゆふ
だちの雨

こもりゐ

北南あけはなたれしわが離室にひとりこもれば木
草見ゆなり

青みゆく庭の木草にまなこおきてひたに静かに籠
れよとおもふ

めぐらせる大生垣の旗の葉の伸び清らけしこもり
ゐてみれば

門口のふりぬる橋のみじかきをわたりわたらずあ
そぶ夕暮

こもりゐの家の庭べに咲く花はあほかた紅し梅雨
あがるころを

焚く香のほひほのかにこもりたる夏ごもりのわ
が部屋をよしとす

かきこもり此處に住めれど明日知らぬ家なし人は
家をちもへり

疲 勞

怠^{なま}けぬてくるしき時は門^{かど}に立ち仰^{あや}ぎわびしむ富士^{ふじ}
の高嶺^{たかね}を

怠^{なま}けつつ心^{こころ}くるしきわが肌^{はだ}の汗^{あせ}吹きからす夏^{なつ}の日^ひ
の風^{かぜ}

り 門^{かど}口^{ぐち}を出^いて入^いる人^{ひと}の足音^{あしおと}に心^{こころ}冷^{ひや}えつつ怠^{なま}けこもれ

心^{こころ}憂^{うれ}く部^べ屋^やにこもれば夏^{なつ}の日^ひの光^{ひかり}わびしく軒^{のき}にか
ぎろふ

なまけをるわが耳^{みみ}底^{そこ}に浸^しみとほり鳴^なく蟬^{せみ}は見^みゆ軒^{のき}
ちかき松^{まつ}に

無^む理^り強^{じやう}ひに爲^し事^{こと}いそげば門^{かど}さきの田^たに鳴^なく蛙^{かはづ}みだ
れたるかな

蚤^{のみ}のゐて脛^{すね}をさしさすゐぐるしさ日^ひの暮^くれぬま
もの書^かきをれば

わが側に這ひよる蜘蛛を眺めぬてやがて殺しぬ机
のかけに

庭の畑

しこ草の茂りがちなる庭さきの野菜畑に夏蟲の鳴
く

葱苗のいまだかぼそくうす青き庭の畑は書齋より
見ゆ

いちはやく秋風の音をやどすぞと長き葉めてて蜀
黍は植う

その廣葉夏の朝明によきものと三畝がほどは芋も
植ゑたり

もろこしの長き垂葉にいづくより來しとしもなき
蛙宿れり

今は早や振がむと思へど惜しまれて見つつただ居
り蜀黍の實を

紫蘇しそ蓼たてのたぐひは黒くろき猫ねこの兒このひたひがほどの地ち
に植うゑたり

青紫蘇あじそのいまださかりをいつしかに冷ひやし豆腐とうふに
我が飽あきにけり

朝あさゆふべつちかひながらわが植うゑしものたぐひ
に愛憎あいぞうのわく

夏 富 士

雲くもまよふ梅雨つゆ明空あけぞらのいぶせきに曉あかつきばかり富士ふじは見
らるる

紫むらさきに澄すみぬる富士ふじはみじか夜よの曉あかつき起おきに見みるべか
りけり

たづね来て泊まれる人をゆり起おす夏なつめづらしき今朝けさ
の富士ふじ見みよ

めづらしくこの朝あさ晴はれし富士ふじが嶺ねを藍あゐ色いろふかき夏なつ
空そらに見みつ

籠かご陰かげふくみ湧わき立ち騒さわぐ白雲しろくものいぶせき空そらに富士ふじは

叢むら雲くもにいただき見みする愛鷹あいたかの峰ねの奥おくぞと富士ふじを思おもへり

裾野すそは夏雲なつぐもの垂たりぬる蔭かげにうす青あおみ沼津ぬまづより見みゆ富士ふじの

雑 詠

梅雨つゆ晴はれのわづかのひまに出いでてみる庭にわの柘榴ざくろの花はな
はまさかり

散ちりたまる柘榴ざくろの花はなのくれなゐをわけてあそべり
子蟹こがねがふたつ

ゆきあひてけはひをかしく立ち向むかひやがて別わかれて
ゆく子蟹こがねかな

庭木にわき草くさあをみくろずみ茂しげりゆく梅雨つゆ夏なつかけてわび
しかりけり

生垣いけがきの横まさの若葉わかばの色いろふかみ土ど用もちわびしき風かぜは吹ふく
なり

いささかの蜺しじみ煮になむと眞ま清し水みづにひたし生いけおく夏なつ
のゆふぐれ

伸のびすぎて葉はのみしげれる蜀黍もろこしに紅べにの毛けたらす實み
をいまだ見みず

ひとの畑はたの蜀黍もろこしは瘦やせて實みをもちつわがのはただ
に青あおみしげれり

桃もも色いろの緋ひ桃もものいろの耳みみ朶たの少せう女にょは泳およぐ邊へ浪なみがなか
に

岸きし邊べこそ浪なみは繁しげけれ沖おき邊べさし泳およぎてゆけや耳みみあか
き子こよ

蟻あひの蟲むし庭には這はひめぐり群むらがれる眞ま黒くろき姿すがた眼めにいたき
かな

蟻あひの蟲むし庭には這はひめぐり日ひに透すきて青あおき葉は蘭らんの葉はかけ
にも見みゆ

繁山のしげりて黒き愛鷹の峰のとがりの夏の色濃

片空に凝りゐる雲の下かけに長き尾ひけり富士の裾野は

みじか夜のいまだ小暗き明方のとほ山に湧く雲の眞白さ

蟬なくや西ゆひがしゆ庭の木ゆ或は軒端の廂ゆ聞ゆ

温泉宿の庭

更けぬればひびき冴えゆく築庭の奥なる瀧に聞き
恍けてゐる(吉奈温泉にて)

燈火のとどかぬ庭の瀧の音をひとりききつつ戸を
さしかねつ

水口につどへる群のくるぐろと泳ぎて鮎も水も光
れり

鶴たきあきつ蛙かろこ子あそび恍ぼけ池いけにうつれる庭にわ石いしのか

まひおりて石せき菖しやうのなかにものあさる鶴たきの咽のど喉ごの
黄きいろさ見みたり

庭にわ石いしのひとつひとつに蜥とが蜴げゐて這はひあそぶ晝ひるとな
りにけるかな

裾野村

日ひの光ひかりつゆけき朝あさの豆ま畑はたのなかみちゆけば埃ほこり立つ
なり

籬せき木き槿ぎんむらさきに咲さく裾野村すのむら石いしころ路みちを日暮ひぐさ下くだれ
り

杉山すぎやまの木き叢むらがうへにかかりたるゆふぐれの月つきは十
日かごろの月つき

みそ萩はぎの花はなさく溝みぞの草くさむらに寄よせて迎むか火へたく子こ等ら
のをり

みそ萩の花にほこりのほのみえて葉がくれにゆく
水の音きこゆ

孟蘭盆に今宵ありけりみそ萩の花咲く溝を見つつ
思へば

蜘蛛の鳴くゆふぐれの旅籠屋に煙草ほるにがく喫ひ
てをるなり

竹やぶに鶏をりてもあさるけはひ久しき夏の夕
ぐれ

畦に立つ蜀黍の葉の長さ葉の垂りてつゆけき今宵
の月夜

とびとびに立ちてさびしき月の夜の蜀黍は見ゆ桑
畑の畔に

鶴鶴と河鹿

脚ほそき鶴鶴鳥は岩蔭にわがをる知らず岩の上に
啼く

水あげて瀬に立ちならぶ石ごとに糞してあそぶ鶴
鴿鳥

羽蟲まつ河鹿が背は瘦せやせて黒みちぢめり飛沫
のかげに

淵尻の岩端にゐて羽蟲とる河鹿しばしば水に落つ
るなり

岩の間をねりて流るる山溪の荒瀬に水の玉湧き流
る

夜の蟬

目ざめゐて夜半の暑きに耳を刺す蟬の聲おほし家
のめぐりに

夜をさわぐをちこちの蟬のけうとくに馬追蟲は蚊
帳に來て鳴く

秋近し

何はなくたべむと思ふたべものも秋めくものかこ
もりてをるに

畑なかの小徑をゆくとゆくりなく見つつかなしき
天の河かも

天の河さやけく澄みぬ夜ふけてさしのぼる月のか
げはみえつつ

うるほふとおもへる衣の裾かけてほこりはあがる
月夜のみちに

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆ
なり

園の花つぎつぎに秋に咲きうつるこのごろの日の
しづけかりけり

うす青み射しわたりたる土用明けの陽ざしは深し
窓下の草に

秋づきしものけはひに人のいふ土用なかばの風
は吹くなり

愛鷹の根に湧く雲をあした見つゆふべみつ夏のを
はりと思ふ

明け方の山の根にわく眞白雲わびしきかなやとび
とびに湧く

大野原の秋

富士の南麓にあたる裾野を大野原と呼ぶ、方十里にも及びたらむか、見る限りの大野原なり。

富士が嶺や裾野に來り仰ぐときいよよ親しき山に
ぞありける

富士が嶺の裾野の原の眞廣きは言に出しかねつた
だにゆきゆく

富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこわがみてをれ
ばうすらぎてゆく

大わだのうねりに似たる富士が嶺の裾野の岡のう
ねりおもしろ

穂すすきの原まひわたるつぶら鳥うづらの鳥は二
つならびとべり

つつましく心なりゐて富士が嶺の裾野にまへるう
づら鳥見つ

富士が嶺の裾野の原のくすり草せんぶりを摘みぬ
指いたむまで

富士が嶺の裾野の原をうづめ咲く松蟲草をひと日
見て來ぬ

なびき寄る雲のすがたのやはらかさけふ富士が嶺
の夕まぐれかな

茅萱が原

かすかなる花にもあれや背低松たちならぶ岡の茅
萱の花は

はたはたと茅萱が原の日あたりに機織蟲は音たて
てとぶ

飛ぶかけのをりをり見えて萱原の垂穂が原に蟲の
鳴くなり

秋の野を朝明登ればおきわたすしら露の上うへに落おつ
る吾が影

東京まで

近年胃腸の衰へたる事甚し、信濃なる白骨温泉はその病
によしとききて九月中旬遙々と沼津より出で立つ。

まひのぼる朝あがり雲の渦卷の眞白きそらに富士
の嶺見ゆ

うとうとと汽車にねむればときをりに法師蟬さこ
ゆ山北あたり

相模なる松田の驛えきに下りてゆく小間物商しやうも秋めけ
るかな

秋風の藍色の海に三つ二つうかびゐてちさき海人
の釣舟

川向ひ松原のかげの桑畑に吹く秋風はみだれたる
かな

白骨温泉

山路なる野菊の莖の伸びすぎて踏まれつつ咲ける
むらさきの花
おほかたの草木いろづける山かげの蕎麥の畑を刈
り急ぐ見ゆ

湯の宿のゆふべとなれば躬みづからおこしいそし
むこれの炭火を
消えやすき炭火おこすといつしかにこころねもご
ろになりてぬにけり
露干なば出でてあそばむあかつきの薄が原のかが
やきを見よ
四方の峰曇りて薄輝やかぬ野なかの樺に百舌鳥の
ゐて啼く

来て見れば山うるしの木にありにけり樵の林の下
草紅葉

冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすぢ澄めるむら
さきにして

枝ほそき落葉木立にくれなわの實をふさふさと垂
らす木のあり

銅なす落葉の木木のかがやきをひもすがら見て山
ゆくわれは(上高地へ)

上高地附近

上高地附近のながめ優れたるは全く思ひのほかなりき、
山を仰ぎ空を仰ぎ森を望み溪を眺め涙端なく下る。

いわけなく涙ぞくだるあめつちのかかるながめに
めぐりあひつつ

またや来むけよこのままにゐてやゆかむわれのい
のちのたのみがたきに

まことわれ永くぞ生きむあめつちのかかるながめ
をながく見むため

山七重わけ登り来て斯くばかりゆたけき川を見む
とおもひさや（梓川）

たち向ふ穂高が嶽に夕日さし湧きのぼる雲はいゆ
きかへらふ

わが伴へる老案内者に酒を與ふれば生來の好物なりと
てよろこぶこと限りなし。

老人のよろこぶ顔はありがたし残りすくなきいの
ちをもちて

燒嶽頂上

上高地より燒嶽に登る、頂上は阿蘇淺間の如く巨大なる
噴火口をなすならずして隨所の岩陸より煙を噴き出す
なり。

群山のみねのとがりのまさびしく連なれるはてに
富士の嶺見ゆ

登り来て此處ゆのぞめば汝がすむひんがしのかた
に富士の嶺見ゆ（繪葉書にかきて妻へ）

岩山の岩の荒肌ふき割りて噴きのぼる煙とよみた
るかも

わが立てる足もとにひろき岩原の石のかけより煙
湧くなり

聴きすます耳にしみ入り足もとに湧き昇る煙とよ
みたるかも

降りゆくとわが見おろせば秋日さし飛驒の山川う
ららけく見ゆ

原始林

燒嶽より飛驒國中尾村をさして下るに路二里がほど斧
鉞を知らぬ大森林のなかをゆくなり。

双手もて杖をつきたて立ちいこふ森の深みにわが
心燃ゆ

まなかひの老樹の幹のつらなりを見わつつ心ざわ
だたむとす

岩山に大樹しみ立ち樹樹の根の岩に苔むせり森の
かぎり

時知らぬ樹樹のよはひぞおもはるる森のかぎりの
樹樹をあふぎつつ

日の光とほく洩れ來つ老樹なる根方のわれに射し
て寒けき

何の葉とかしこみてとる足もとのこれの落葉は笠
の大きさ

醜さは下下の獸にさこそ似め岩這ひくだるわれの
姿の

野口の築

そのすゑ神通川に落つる飛驒の宮川は鮎を以て聞ゆ、雨
そば降る中を野口の築といふに遊びて。

時雨ふる野口の築の小屋にこもり落ちくる鮎を待
てばさびしき

たそがれの小暗き闇に時雨降り築にしらじら落つ
る鮎おほし

築の簀の古りてあやふしわがあたり鮎しらじらと
飛び躍りつつ

かき撓み白うかりて流れ落つる浪よりとびて跳ぬ
る鮎これ

おほきなる鯉落ちたりとあらび寄る時雨降る夜の
築のかがり火

惠那曇

美濃の國中津町在永瀧の鳥舎といふに小鳥網を見る。
「小笠置晴れて惠那曇」と日和を占ふ土地の言葉の通り
の寒き朝なりき、小笠置は北に惠那は南にそびゆ。

惠那ぐもり網張りて待つ松原のいろの深きに小鳥
寄りこぬ

恵那ぐもり寒けき朝を網張りて待てば囿のさやか
音に啼く

小松原寒けきかけにかくされて囿のひわの啼きし
く聞ゆ

網張りて待つやささ鳥ちちちと啼きて空ゆくそ
のささ鳥を

百舌鳥と鮒

秋百舌鳥の高啼くこゑは軒にひびき部屋に響きて
居るにをられぬ

吾をよぶ吾が子の聲のわびしさよをちこちに啼く
百舌鳥ききをれば

百舌鳥啼くや居るにをられぬわびしさの募れる今
朝を釣に出でゆく

鮒釣るといそぐ田中のほそ路のゆきどまりなる藪
に百舌鳥啼く

冷やけき 稻田の路をゆきすぎて 通る 豆畑にこぼる
ぎの鳴く

藪かけに新聞紙敷きてかき坐り寄る 鯛まつよ一す
ぢの糸に

小舟もて釣りゆく人の美しさよ竹藪かけに糸を垂
れつつ

陸釣は如何にやと棹の手をとめて聲かけてゆく 沖
釣人は

小鳥 鶉

夙くおきて机によれば 木枯の今朝吹きたたず 鶉啼
くなり

わが庭に来啼くひたきを知りそめて 朝朝待つぞう
れしかりける

枯芝に垂りたる梅の 錆枝にひたき啼さゝめて 冬晴の
風

啼^なく 花^か落^れ葉^はちらばり 動^うく 風^{かぜ}の 日^ひに 鶴^{ひたき}は ひくき 枝^{えだ}にのみ

まひうごく 庭^{にわ}の 落^{おち}葉^はの 色^{いろ} 冴^さえて 風^{かぜ}あかるきに 鶴^{ひたき}な
くなり

煙 草

眼^めにふりて 惶^{あわただ}しくもとりあげつ 膝^{ひざ}の 蔭^{かげ}なりしこれ
の 煙^{たばこ}草^を

うつつなく 喫^すひつけて 口^{くち}にふくみたる 爲^し事^{こと}なかば
の いつぷく 煙^{たばこ}草^を

よき 煙^{たばこ}草^をあしき 煙^{たばこ}草^をの けぢめなど 忘^{わす}れて 今^{いま}はただ
に 喫^すふ 煙^{たばこ}草^を

手^て離^{はな}さぬ 煙^{たばこ}草^をにしあれど しみじみとうましと 喫^すふ
は いくたびならむ

人^{ひと}目^めさけてひとりこもらふたのしさを 煙^{たばこ}草^をの 煙^{けむり}む
らさきに たつ

夕日と食慾

木枯こがれのをりをり響ひびきわたりつつ窓まどの日ひざしはいよ
よ澄すみたり

ガラス越こし射やす日ひながらにわが頬ほにほてりおぼゆ
る今日けふの冬ふゆの日ひ

わが窓まどのくもりガラスに含くみ照てる冬ふゆの日ひざしはあ
きらけきかも

午ひるかけて窓まどに射やしたる冬ふゆの日ひざし永ながしとたの
しみ向むかふ

落おつる日ひのかがやきみせてガラス戸どはいま冷ひややか
に照てりわたりたり

夕日ゆふひ影かげ窓まどにつめたき部屋へやにゐてこよひは何なにをたべ
むと思おもへり

身みにしみてうましとおもふたべものを何なにはあきて
も食たべたきゆふべ

よるべなきけふの心のわびしさのかすかに動くた
べ物の慾に

このゆふべ食べたしと思ふ何ならむ思ひまはせど
おもひあたらぬ

雑 詠

いつ注ぐもこぼす癖なるウキスキイこぼるるばかり
注がてをられぬ

わが舊き歌をそぞろに誦しをればこころ風ぎ來ぬ
いざ歌詠まむ

借り住まふ家の庭木のとぼしきに春はやくいでて
うぐひすの啼く

雪どけの平軒端にあまねきに庭の木立にうぐひす
の啼く

とりどりの煙あがれり斑ら雪消えのこる春の田末
の町に

入江の冬

わが傍追ひ越す人のあまたありて冬田の中なかの路ぢは
晴はれたり（静浦附近）

冬田ふゆた中なかあらはに白しろき路ぢゆけばゆくての濱はまにあがる
浪見なみゆ

田たにつづく濱松原はままつはらのまばらなる松まつのならびは冬ふゆさ
びてみゆ

も 朝あさたけて晝ひると思おもふに松原まつはらの松まつの根ねに這はふ冬ふゆの靄もやか

桃畑ももはたけを庭にわとしつづく海人あまが村冬むらふゆ枯がれはてて浪なみただ
きこゆ

海人あまが家やに飼かふ者ものあらし入江いりえなる冬ふゆ枯がの木きに鳩はとの
群むられをり

93 門かどごとに橙だいだい熟じうれし海人あまが家やの背戸せどにましろき冬ふゆの
浪なみかな

冬さびし静浦の濱の松原にうち仰ぐ富士は眞白妙
なり

うねりあふ浪相打てる冬の日の入江のうへの富士
の高山（静浦より三津へ渡る二首）

浪の穂や音にいてつつ冬の海のうねりに乗りて散
りて眞白き

冬日いまだ晝に昇らず小松山巖折り合ひて影のこ
まかさ（江の浦附近）

松山はかけりふかけど山の裏くぬぎが原の冬日う
ららか

舟ひとつありて漕ぐみゆ松山のこなたの入江藍の
深きに

釣糸をものに巻きつつさざ波のかがよふ舟に一人
居る見ゆ

奥ひろき入江に寄する夕潮は流れさびしき瀬をな
せるなり

うち越えて路にあがれる浪の泡夕日にさむくかが
やけるかな

しみじみと寒き夕日になりけり入江の奥に波の
さざめき

足もとにさわげる浪は満潮のゆたけき音をたたへ
たるかな

網あぐる海人がさけびのもはらなる道のかたへに
箴の音さこゆ

曳網の網の尻とり老いたるはその網たたむ石の上
にまろく

舟に叫ぶ海人が叫びはおほかたは海人どちらにのみ
きこゆべらなる

大船の蔭にならびて泊せる小舟小舟に夕げむり立
つ

大根を煮るにほひして小さなる舟どち泊る冬の夕
ぐれ

砂の上にならび静けき冬の濱の釣舟どちは寂びて
ましるき

伊豆石山

小松山なぞへの圓み掘りさきて冬の日なたに石切り出す

沖爲事冬をすくなみ海人がどち入江の山に群れて石切る

伊豆石のやはらかき石冬草の原につまれて眞白なるかも

見てあれば眞白きなかにむらさきのかすけき色す積まれし石は

石山に立てる男の衣の色切り出す石に似て眞白なる

己が身を繩にくくりつ千尋なす崖のさなかに居りて石切る

真ま白しろなる幕まく垂たりなせる石山いしやまの崖がきに吊つられて石切いしきりれ
り人ひと

人ひと黒くろく並ならびゐて掘ほる石山いしやまの切きりそぎ崖がきの冬ふゆの夕ゆふば
え

石山いしやまの切きりそぎあとのましろきに音おと立てて落おつ真ま
白しろき石いしは

石山いしやまの崖がきの端はに立たつ鏝つぎ廣ひろの帽ぼう子しの人ひとのあざやけき
かも

海人あまが村裏むらうらの岩山いしやまにとりどりに洞ほらをうがちて物置もの置き
けり見みゆ

おのづから遊あそびよげなるなぞへして冬草山ふゆくさやまは子等こら
を遊あそばす

夕日ゆふひ射さす冬野ふゆののなかに人ひとうごき枯草かれぐさの色いろあざやけ
きかも

静かなれ心

年いつしか暮れむとするに驚きて惶しく刷らせたる年
賀状の端に書きつけし歌。

年ごとに年の過ぎゆくすみやかさ覺えつつ此處に
年は迎へつ

寄る年の年ごとにねがふわがねがひ心おちゐて静
かなれかし

去年あたり今年にかけていよよわが静かなれとふ
ころは募る

あさはかのわれの若さの過ぎゆくとなのしみて待
つころ深みを

わが生きて重ねむ年はわかねどもいま迎ふるをね
もごろにせむ

大正十一年

土肥温泉にて

一月一日、沼津狩野川々口より伊豆國土肥温泉に渡り
日あまり滞在す。

奥山にはだら雪積み伊豆の國の海邊柴山時雨ふる
なり（船中雜詠五首）

寒の雨しらじら降りて柴山のはづれにかかる瀧の
かすけさ

冬の雨しき降る海ゆ寄る浪の高くあがらず岸に眞
白き

崖下のうねりの浪にゆられつつこの小さき船は岸
に沿ひたり

冬さびて赤みわたれる断崖の根に寄る浪はかすか
なるかな

柴山のかこめる里にいて湯湧き梅の花咲きて冬を
人多し

湯の宿のしづかなるかもこの土地にめづらしき今
朝の寒さにあひて

わが泊り三日四日つづき居つきたるこの部屋に見
る冬草の山

わが坐るま向ひの方ゆひびきくる冬の夜ふけの海
のとどろき

この里に梅の花咲けりうちわたす枯柴山に杉は赤
錆び

北きたの風かぜかすかに吹ふきて椿つばきの葉は枇び杷ぱの葉は光ひかり繡め眼じ兒ろ
よく啼なく

少女をとめにや姫ひめにや青あおき襟えり卷まきのくぐみゆく見みゆ霜しも田だの
末すえを

麥あやを踏ふむ背せ高たかき叟をぢの頬ほかむりひねもすを居をる其そ處こ
の麥あや田だに

冬ふゆ草くさの山やまのくぼみの檜ひのの木きにのこる枯かれ葉はの色いろのさ
やけさ

朝あさを注つぐ紅こう茶ちやの色いろの檜ひのの葉はのなほ落おちやらず春はる立た
つといふに

夕ゆふ風かぜの日ひ和や癖くせなる雲くも焼やけて染そめ來きたるなりわが向むかふ
窓まどを

雪ゆきもよひ寒さむけき空そらにうち群むれて千せん羽は鴉がらすわたるこの
里さとの上うへを

温い泉ずい尻じりながれて湯ゆ氣けのたつ濱はまの芥あきたの霜しもに鴉がらす群むれた
り

空に居る雲うす赤し入りつ日の消えのこりたる冬
山のうへに

わが向ふ冬草山の上に垂りて雪をふくめるあかつ
きの雲

雲いまだうかばぬ朝の凍空の青みをかざる冬草の
山

柴山の尾根のわかれの山窪ゆ光さし來て昇る冬の
日

柴山の尾根よりいづる冬の日はひたと射したりわ
が坐る部屋に

山の端にけぶらふ朝日麓田の枯田の霜をなかば照
せり

朝日子の光とどかぬ麓田の奥の根方の田の霜ぞ濃
き

向つ山なぞへに立てる炭焼の煙にやどる冬の日
かけ

土地に梅おほし、暖き所とて一月初めにはや白々と咲き
出づ、梅の歌五首。

道^{みち}ばたの古^{ふる}寺^{でら}のかどのたかむらの蔭^{かげ}に見^み出^いてし梅^{うめ}
の初^{はつ}花^{はな}

青^{あお}竹^{たけ}のしみ立^たつかげにほそほそと枝^{えだ}を垂^たりつつ咲^さ
けるこの梅^{うめ}

ひややけき日^ひ蔭^{かげ}に咲^さける白^{しろ}梅^{うめ}のしみみに咲^さきて花^{はな}
のちひささ

たかむらの小^せ暗^{くら}き蔭^{かげ}に浮^うき出^いでて咲^さく梅^{うめ}の花^{はな}は雪^{ゆき}
のちひささ

この梅^{うめ}はものをかもしよ居^か向^むかひて久^{ひさ}しくみれば
いよよかはゆき

伊^い豆^づの國^{くに}に我^わが居^かて見^みやる海^{うみ}むかひ雪^{ゆき}かづき伏^ふせ
る甲^か斐^ひ信^{しん}濃^のの山^{やま}

甲^か斐^ひ信^{しん}濃^のの山^{やま}とわが思^{おも}ふ遠^{とほ}山^{やま}は雪^{ゆき}をかづきてこち
ごちに立^たつ

妻、沼津より明日來らむといふ夜俄かに風の吹き立ちければ。

我妹子が明日を船出しわれを見に來むといふ今宵
風吹き立ちぬ

風の音つねならず身にこたふるは來ぬ我妹子をお
もふゆゑにぞ

末の子を抱きかきよせ今宵この風をなげきてある
らむ我妹

いとし兒を四人まうけついつしらずをみなさびし
てよろしき我妹

我妹子のころはひたにわれに向ふ我妹子のこ
ろたもたざらめや

梅の歌

借り住まふ邸の庭にかぞふれば木がくれて咲く五
本の梅

春はやく咲き出でし花の白梅の褪せゆくころぞわ
びしかりける

花のうちにはさかり久しき白梅の咲けるすがたのあ
はれなるかも

老いたるは夙く散りうせつ枝長き若木の梅は褪せ
ながら咲く

ゆくさくさ仰ぎてすぐるわが門のあせぬる梅をう
とみかねたり

庭石の錆びたる上に枝垂れて咲きぬる梅の花のま
しろさ

とある酒場にて

停車場に人を送りてかへるさの夜更に寄れる酒場
の三人ぞ

いとはだらに鬢の毛白き老教授はウキスキイを呼
ぶわれも然かせむ

テーブルの上に枝張れる盆栽をかたよせて語る夜
ふけの三人

話やがて深山の鳥の聲に及びわれおもひいでぬく
さぐさの鳥を

秋空にとべる尾長の尾長鳥のさびしき姿をおもひ
いでたり

みちのくに豆蒨鳥と呼ぶ鳥の郭公の聲をおもひ
でたり

山ざくら

三月末より四月初めにかけて天城山の北麓なる湯ヶ島温
泉に遊ぶ。附近の溪より山に山櫻甚だ多し、日毎に詠みい
でたるを此處にまとめつ。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとす
なり山櫻花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれ
る山ざくら花

花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける
山ざくら花

かき坐る道ばたの芝は枯れたれや坐りて仰ぐ山ざ
くら花

おほみ空光りけぶらひ降る雨のかそけき雨ぞ山ざ
くらの蔭に

瀬瀬走るやまめうぐひのうるくづの美しき春の山
ざくら花

山ざくら散りしところ眞白くぞ小石かたまれる
岩のくぼみに

つめたきは山ざくらの性にあるやらむながめつめ
たき山ざくら花

岩かけに立ちてわがみる淵のうへに櫻ひまなく散
りてをるなり

朝づく日うるほひ照れる木がくれに水漬けるごと
き山ざくら花

峰かけてきほひ茂れる杉山のふもとの原の山ざく
ら花

吊橋のゆるるあやふき渡りつつおぼつかなくも見
し山ざくら

椎の木の木むらに風の吹きこもりひと本咲ける山
ざくら花

椎の木のしげみが下のそば道に散りこぼれたる山
ざくら花

とほ山の峰越の雲のかがやくや峰のこなたの山ざ
くら花

ひともとや春の日かけをふくみもちて野づらに咲
ける山ざくら花

刈りならず枯萱山の山はらに咲きかがよへる山ざ
くら花

萱山にとびとびに咲ける山ざくら若木にしあれや
その葉かがやく

日は雲にかけを浮かせつ山なみの曇れる峰の山ざ
くら花

つばくらめひるがへりとぶ溪あひの山ざくらの花
は褪せにけるかも

今朝の晴青あらしめきて溪間より吹きあぐる風に
櫻ちるなり

散りのこる山ざくらの花葉がくれにかそけき雪と
見えてさびしき

山ざくら散りのこりゐてうす色にくれなるふふむ
葉のいろぞよき

富士の歌

或る日天城山上なる噴火口の跡と云へる青篠の池に遊
ぶ。ゆくゆく願れば富士うららかに背後に聳えたり。

わが登る天城の山のうしろなる富士の高きはあふ
ぎ見飽かぬ

高山にのぼらざれば高山の高きを知らずとか云へる言
葉ありしをおもひ出でて一首。

たか山にのぼり仰ぎ見高山のたかき知るとふ言の
よろしさ

山川に湧ける霞のたちなづみ敷きたなびけば富士
は晴れたり

まがなしき春の霞に富士が嶺の峰なる雪はいよよ
かがやく

富士が嶺の裾野に立てる低山の愛鷹山は霞みこも
らふ

愛鷹の裾曲の濱のはるけきに寄る浪しろし天城嶺
ゆ見れば

伊豆の國と駿河の國のあひにある入江のま中漕げ
る舟見ゆ

湯ヶ島雑詠

うちわたす萱野が原の枯萱は刈りならされて積ま
れたる見ゆ

瀬瀬に立つあしたの霞のかたよりてなびかふ藪に
うぐひすの啼く

この岩の苔の乾きのぬくときに寝てをれば見ゆ淵
にあそぶ魚

川にひたひたと水うちすりてとぶ鳥の鶴鴿多しこの谷

たぎち落つる眞白き水のくるめきのそこひ青めり
春の日なたに

岩窪の砂のたまりに荒溪のしぶきは飛び來日のい
ろに照り

かちわたり濡れし足よく川ばたの枯芝原のつぼす
みれ花

人の來ぬ谷のはたなる野天湯のぬるきにひたるい
つまでとなく

椎しひの落葉おちばちりたまりゐてくされたる野の天てんいで湯ゆに
入いりてひそけし

淵ふち尻しりの浅あさみの岩いはに出いでてをる鰕かじかのすがた静しづかなる
かも

やはらかく芽めぶける木き木きにかくろひて散ちりのこり
たる山やま椿つばきの花はな

窓まどさきの冬ふゆの木きに來きて啼なく鳥とりは昨きのふ日もけふも山やま雀がら
の鳥とり

目め白しろ鳥どりなきすぎゆけば朝あさ静しづの庭にわ木きがうれに山やま雀がら
啼なく

石せき菖しょうの花はな咲さくことを忘わすれるきうすみどりなる石せき菖しょう
の花はな

道みちうへの井い手てに茂しげりて片かたなびく石せき菖しょう草くさの風かぜのかが
やき

なめらかに水みづ越こえおつる濡ぬれ石いしに鵓いしたたき鴿かゐて啼なく聲こゑき
こゆ

ならび立つ赤松が根の下草のしげみの露に小鳥な
くなり

わが宿のいで湯の湯氣のすゑのびて谷むかひなる
杉山に見ゆ

吊橋の上は木立のさびしさよ川下とほき瀬瀬の月
かけ

瀬瀬に立つ石のまるみをおもふかな月夜さやけき
谷川の音に

鐵瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわ
れも寝む(深夜獨酌)

梨の木にまとふ藤蔓咲きいでて梨かとぞまがふ梨
の花のあひに

茂り葉にこもりて白き房花の咲きしだれたる茂り
葉馬酔木

雪なせるみじかき房のすずなりに咲きて垂りたり
馬酔木の花は

岩いわごとごとににせせままりりてて白しろきき瀬せををななせせるるたたぎぎつつ谷たに川がはにに釣つ
 るる山やま魚うしななりり

青あおああららしし吹ふきき落おちち來きたるる谷たに川がはのの椎ゆのの木こかかげげををゆゆきき行ゆ
 ききてて釣つるる

川がは下しもゆゆ釣つりりももてて來きたるる二ふた人たりづづれれのの釣つるるとともも見みええずず飽う
 くくととししももせせぬぬ

踏ふみみわわたたるる石いしののかかししららのの冷ひやややかかささ身みににししむむ瀬せ瀬せにに
 河が鹿じかななくくななりり

ななめめららかかにに石いしここゆるゆる瀬せににままひひああそそぶぶ羽は蟲むしととりりつつ
 啼なくくやや河が鹿じかはは

山やまかかげげのの日ひざざししかかげげれればば谷たに川がはののひひびびききもも澄すみみてて河が
 鹿じかななくくななりり

照てりり澄すめめるる春はるくくれれががたたのの日ひののいいろろににひひたたりりてて立た
 るるととりりどどりりのの木きよよ

ななびびききああふふととりりどどりりのの木きののいいろろどどりりやや春はるくくれれががた
 のの嵐あらし吹ふくく山やま

山そばのかけ橋わたる春の日に匂ふ若葉のなかの
かけ橋

山そばのかけ橋わたるわれの上に啼きすましたる
うぐひすの聲

湯げむりの立ちおほひたる谷あひの湯宿を照らす
春の夜の月

まなかひに見るおもひして我妹子に文かきをれば
河鹿なくなり (二首妻へ)

やよ汝が心かよわさ清らかさ山ざくらの花に似ず
と云はめやも

井手の鮎子

大川を堰ける野中の井手に入りて浅瀬におよぐ鮎
の子の見ゆ

うすらかに道の埃のまひ浮び水皺寄る瀬におよぐ
鮎見ゆ

水を掩ふ藪いたどりの葉かけなる羽蟲に跳ぬる鮎の子の群

うちむれておよぐ鮎子にほどのよき井手の流の瀬のつよみかな

この春の日照をおほみ石垢の深き浅瀬をおよぐ鮎子等

なめらかになびく川藻のひとふさのなびける蔭をゆける鮎の子

なめらけき尾緒のふりや浅き瀬の石の垢つつく鮎の子がふり

なめらかに目のさす石のかけにゐて尾緒さやけくおよぐ鮎の子

大御姿

或る日の新聞に皇太子殿下の御肖像を大きやかなる写真版として掲げたり、乃ち壁にかかけ仰ぎまつりて歌へる歌。

かむながら神のみすゑにましまして親しき君にお
はすかしこさ

わが兄子といはまほしきぞかしこかる大みすがた
にむかひまつりて

しもじものわれ等がまをす言の葉も聽かせたまふ
とおもふかしこさ

久方のあめのもなかを渡る日はればれしさに君
はおはせり

山川も寄りてつかへむををしさをもたせますかも
大みすがたに

おほどかにゑみておはせばあなかしこゆたけきお
もひわれらもぞする

事しげき御代をはるけくのぞまして笑ませたまふ
か大みすがたは

この國ぞ若しかぐはししろしめす日嗣の皇子をい
ま見るがごと

大野原の初夏

富士の麓大野原の秋は既に知りぬ、初夏の野原のながめ
いかならむとて六月初めまた其處に遊ぶ。

真日中の日蔭とぼしき道ばたに流れ澄みたる井手の
せせらぎ

道にたつ埃を避けて道ばたの桑の畑ゆけば桑の實
ぞおほき

桑の實を摘みて食べつつ染まりたる指さきかはゆ
童さびして

土ほこりうづまき立つや十あまり荷馬車すぎゆく
夏草の野路に

埃たつ野中のみちをゆきゆきて聞くはさびしき頬
白の鳥

道ばたに埃かむりてほの白く咲く野茨の香こそ匂
へれ

熟れわたる麥のほひは土埃まひ立つ道に流れた
るかな

白うつぎ紅うつぎ咲く野の藪の茂みに居りてうぐ
ひすの啼く

麥の穂のみなかきたれてふくみたる夕日のいろの
なやましきかな

麥畑のひとところ風の吹きたてば夕日は亂るその
穂より穂に

野の日をひと日富士をまともに仰ぎ来てこよひを泊る
野の中の村

ゆふぐれの山の青みにこもりゐて啼きほほけたる
くろつがの鳥

ひそやかにものいひかくる啼聲のくろつがの鳥を
聞きて飽かなく

曉をうすら白雲わき出でていよよみどりなる若杉
の山

杉山の若き立木のくきやかに青みつらなれり山の
なぞへに

朝山のみどりが下の道ゆけば露ふりこぼす百鳥の
こゑ

草の穂にとまりて啼くよ富士が嶺の裾野の原の夏
の雲雀は

青草を抜き出でてゆるる去年の秋の萩にゐて啼く
巢立の鳥は

此處の野にいま咲く花はただ一いろ紅うつぎの木
のくれなゐの花

ゆくりなく夏野が原にあらはれし眞黒き犬は遠く
より吠ゆ

夏草の大野をこめて白雲のみだれむとする夏のし
ののめ

雲雀なく聲空にみちて富士が嶺に消残る雪のあは
れなるかな

相添あそひて啼なきのぼりたる雲雀ひばりふたつ啼なきのぼりゆ
く空そらの深かみへ

寄より來きたりうすれて消きゆる水みづ無な月の雲くもたえまなし富
士じの山邊やまべに

張はりわたす富士ふじのなだれのなだらなる野原のほらに散ちれ
る夏雲なつぐものかけ

夏雲なつぐもはまろき環わをなし富士ふじが嶺ねをゆたかに卷まきて
眞白ましろなるかも

富士ふじが嶺ねの裾野すそのなぞへ照あしたる今宵こよひの月つきは暈かを
かざせり

み じ か 夜

夜よふかくもの書かきをれば庭にはさきに鳴なく夏蟲なつむしの聲こゑの
したしさ

降りりたてば庭にはの小草こくさのつゆけきに蛙子かへるこのとぶ夏の
しののめ

みじか夜の明けやらぬ闇にかがまりてももの苗植
うる人のかげみゆ

まだ起きぬひとの庭べに露をおびてさやかに咲け
る夏草の花

あかつきをいまだともれる電燈の灯かけはうつる
庭のダリヤに

馬追蟲

やすらかに足うち伸ばしわが聞くや蚊帳に来て鳴
く馬追蟲を

めづらしく蚊帳にきて今なきいでし馬追蟲の姿を
ぞ思ふ

家人のねむりは深し蚊帳にゐて鳴く馬追よこ系か
ぎり鳴け

木槿の花

はしり穂のみゆる山田の畔ごとに若木の木槿咲き
ならびたり (その一)

畑の隈風よけ垣の木槿の花むらさきふかく咲きい
てにけり (その二)

風よけと山田の畔に垣なせる木槿の花はひとり咲
きたり

鋤きすててもものまだ植ゑぬ秋早木槿は畔に咲きさ
かりたり

雑 詠

うちしぶき庭を掩ひて降りしきるゆふだち雨に匂
ひ立つ土

草木うつ雨はきこえてうす青き黄昏の色部屋をこ
めたり

花園の花のしげみを抜き出でてゆたかに咲ける向
日葵の花

このあたり風のつめたき山蔭に咲きてあざやけき
みそ萩の花

秋づけどまだもろ草の青かるをぬき出でて咲ける
みそはぎの花

秋を咲く何百合ならむ山澤の草むらがくれくれな
ゐに咲く

女郎花咲きみだれたる野邊のはしに一むら白きを
とこへしの花

曼珠沙華いろふかきかも入江ゆくこれの小舟の上
よりみれば

わが越ゆる岡の道邊のすすきの穂まだわかければ
紅ふふみたり

粟の穂はみだれなびかふ暴風雨あとのしめりおび
たるあかつきの風に

西日さす窓の明るさにつつまれておもひつつをれ
ば友ぞ戀しき

いかてかは出でて見ざらめ庭木おらぶこの風の日
にゆく飛行機を

畑毛温泉にて

人の來ぬ夜半をよろこびわが浸る温泉あふれて音
たつるかも

わが肌のぬくみといくらもかはらざるぬるさいで
湯は澄みて湛へつ

夜ふけて入るがならひとなりし湯のぬるきもそぞ
ろ安けくてよし

長湯して飽かぬこの湯のぬるき湯にひたりて安き
ところなりけり

つぎつぎに出でし欠伸もいでずなりて心は澄みぬ
夜半の湯槽に

夜のふけをぬるきこの湯にひたりつつ出でかねて
をればこほろぎ聞ゆ

田づらより低き湯殿にひびきくる夜半の田面のこ
ほろぎのこ糸

温泉村湯げむり立てり露に伏す田づらの稻の白き
あしたを

庭さきの稻田におつるわが宿のいで湯のけむり露
とむすべり

うちわたす箱根山なみ山の背のまろきにかかるあ
かつきの雲

めづらしき今朝の寒さよおもはざる方には富士の
高く冴えぬて

垂穂田の稻田のさきの低山にくるずみ深き檜櫟の
木

あるとなきかすけき菴山茶花にふふめるを今朝見
つけたりけり

澤につづく此處の小庭にうつくしき翡翠が来て栢
榴にぞをる

なにげなく聞きわし雨のいとどしく降りひびくか
も酒盡くるころを（深夜獨酌）

蚊帳ごしの灯をみてをれば曉を聞え來るなり遠寺
の鐘

物音もなきあかつきの静もりにひびきてながきと
ほ寺の鐘

ゆくりなく聞く遠寺の鐘の音をさなきころ湧
きてかなしも

をちこちに百舌鳥啼きかはし垂穂田の田づらは露
に伏し白みたり

湯の尻の沼のへりなる萩むらに今朝おく露はしと
どなるかも

わが俣濡れてぞ通る里道の道への草の露のしげき
に

めづらしく俣が通る里みちにみのり伏したり秋草
の穂は

山の根の里道をゆくわが俣走るとせねば啼く鳥さ
こゆ

今朝晴るる秋のよわき日水に射してかすかなるか
も浮草の花

浮草の花ひとつ浮びかがやきて水泥は深し水づく
その葉に

ながめぬて眼ぞまどふなる草むらの露草の花の花
のしげきに

ひこばえの木槿たけ低し露草の咲きさかる中に花
をひらきて

尾張犬山城

犬山の城に登り立ちわが見るや尾張だひらの秋の
くもりを

桑畑の中をすぎ来てかへりみる犬山の城は秋霞せ
り

同所犬山焼とて陶器を産す、その竈のひとつに到り友人
たちと樂焼を試む。

立ち入れば陶器づくりが小屋のうちうす暗き奥に
素焼はならぶ

並べたるなかゆとりいで塵を拂へばましろなるか
も素焼の甕は

とりどりに影を落してならびたり陶器づくりが庭
の白甕

火を入れぬ竈のすがたのさびたるに射して静けさ
秋の日のかけ

紅葉の歌

十月十四日より十一月五日まで信濃上野下野諸國の山
谷を歴巡る。「紅葉の歌」より「鳴蟲山の鹿」に到るまでその
旅にて詠み出でたるなり。

枯れし葉とおもふもみぢのふくみたるこの紅をを
なにと申さむ(その一)

露霜の解くるが如く天つ日の光をふくみにほふも
みぢ葉

ゆくりなく梢はなれてまひうかぶひと葉のもみぢ
玉と照りたり

溪川の眞白川原にわれ等あてうちたたへたり山の
紅葉を

神無月まだ散りそめぬもみぢ葉のあまねき山のか
なしかりけり

鏡なすけふのところに照りうつる山邊の紅葉かな
しかりけり

もみぢ葉のいま照りにほふ秋山の澄みぬる姿さび
しとぞ見し

しめりたる落葉を踏みわが急ぐ向ひの山に燃ゆ
るもみぢ葉 (その二)

わが急ぐ山より見ればむかつ山ゆふ日に燃ゆるも
みぢなりけり

見^みおろせば迫^{せま}りて深^{ふか}き山^{やま}峽^{がた}のかげりつめたき森^{もり}の
もみぢ葉^は

啄木鳥と鷹

落^か葉^ら松^{しょう}の苗^{なえ}を植^ううると神^{かみ}代^{しろ}ぶり古^{ふる}りぬる檜^{ひのき}をみな
枯^からしたり

檜^{ひのき}の木^きぞ何^{なに}にもならぬ醜^{みにく}い木^きと古^{ふる}りぬる木^きをみ
な枯^からしたり

木^きの根^ねの皮^{かわ}剥^むぎとりて木^きをみな枯^か木^きとはしつ
枯^か野^のとはしつ

伸^のびかねし荒^あ野^のが原^{はら}の落^か葉^ら松^{しょう}は枯^か薄^{すすき}よりいぶせく
ぞ見^みゆ

下^{した}草^{くさ}の薄^{すすき}ほほけて光^ひりたる枯^か野^のが原^{はら}の啄^つ木^き鳥^{とり}のこ
ゑ

枯^かるる木^きにわく蟲^{むし}けらをついばむときつつきは暗^{くら}
く此^こ處^この林^{はやし}に

啄木鳥のたむろどころとつどひたる枯木が原のき
つつきの聲

立枯の木木しらじらと立つところたまたまにして
きつつきのとぶ

きつつきの聲のさびしさ飛び立つとはしなく啼け
る聲のさびしさ

くれなゐの胸毛を見せてうちつけに啼くきつつき
の聲のさびしさ

白木なす枯木が原のうへにまふ鷹ひとつ居りてき
つつきは啼く

ましぐらにまひくんだり來てものを追ふ鷹あらはな
り枯木が原に

とびうつる枯木が原のきつつきのするどきすがた
光りたらずや

さかり來てきけばさびしききつつきの啼く音はつ
づく枯木が原に

耳みみにつくきつつきの聲こゑあはれなり啼なけるを遠とほくさ
かりきたりて

枯野の落栗

夕日ゆふひさす枯野かれのが原はらのひとつ路みちわがいそぐ路みちに散ちれ
る栗くりの實み

音ねさやぐおち葉はが下したに散ちりてをるこの栗くりの實みの色いろ
のよろしさ

柴栗しばくりの柴しばの枯葉かへのなかばだに如しかぬちひさき栗くりの
味あじよさ

おのづから干かてかち栗くりとなりてをる野のの落栗おちくりの味あじ
のよろしさ

この枯野かれの猪しも出いてぬか猿さるもぬか栗くりうつくしう落おち
ちたまりたり

かりそめにひとつ拾ひろひつ二ふたつ三みつひろひやめられ
ぬ栗くりにしありけり

上州草津の湯に時間湯といふがありてただ三分間を限り入浴せしむ。その湯は沸騰點に近き温度なれば、一浴室につどへる浴客おほよそ四五十名ばかりがおのの長さ一間幅一尺ほどの板をもちて三十分の間揉みにもみて湯をやはらぐ。湯を揉みつつ聲を合せてうたへるうたのあはれさは一たび此處の湯を訪ひたる人の耳につきて離れぬものなるべし。

このいで湯われ等生かすと病人のつどひ群れたる草津のいで湯

上野の草津の温泉いにしへゆ云ひつたへたる草津のいで湯

湧き昇る湯氣雲なせる高原の草津のいで湯賑はへるかも

たぎち湧く草津のいで湯おほらかに湧きあふれつつ溪川となる

たぎり湧くいで湯のたぎりしづめむと病人つどひ揉めりその湯を

湯を揉むとうたへる唄は病人がいのちをかけしひとすぢの唄

上野の草津に來り誰も聞く湯揉の唄をきけばかな
しも

ありとしも思はれぬ處に五月十月ほどの村ありてそれ
それに學校を設け子供たちに物教へたり。

つづらをり峻しき坂をくだり來れば橋ありてかか
る峽の深みに(小雨村)

おもはぬに村ありて名のやさしかる小雨の里とい
ふにぞありける

蠶飼せし家にかあらむを壁をぬきて學校となしも
の教へをり

學校にも讀める聲のなつかしさ身にしみとほる
山里すぎて

人過ぐと生徒等はみな走せ寄りて垣よりぞ見る學
校の庭の(大岩村)

われもまたかかりき村の學校にこの子等のごと通
る人見き

先生のいちづつ一途なるさまも涙なみだなれ家いえ十とばかりなる村むらの
 學校がっこうに(引沼村)

ひたひたと土つち踏ふみ鳴ならし眞ま裸はだ足あしに先生せんせいは教おしふその
 體操たいそうを

先生のあたまの禿はげもたふとけれ此處こゝに死しなむと教おし
 ふるならめ

小學校こがっこうけふ日ひ曜ようにありにけり櫻さくらのもみぢただに散ち
 りゐて(四萬湯原村)

山やまかけは日ひ暮くれはやきに學校がっこうのまだ終はつらぬか本ほん讀よむ
 聲こゑす(永井村)

山の歌溪の歌

斷きり崖がしにかよへる路みちをわが行ゆけば天あまつ日ひは照てる高たかき
 空そらより

路みちかよふ崖がしのさなかをわが行ゆきてはろけき空そらをみ
 ればかなしも

木木の葉の染れる秋の岩山のそば路ゆくところ
かなしも

さりぎしに生ふる百木のたけ伸びずとりどりに深
きもみぢせるかも

歩みつつところ怯ぢたるさりぎしのあやふき路に
句ふもみぢ葉

わが急ぐ崖の真下に見えてをる丸木橋さびしあら
はに見えて

散りすぎし紅葉の山にうちつけに向ふながめの寒
けかりけり

しめりたる落葉がうへにわが落す煙草の灰は散り
てましろき

とり出でて喫へる煙草におのづからころはひら
けわが憩ふかも

岩蔭の青渦がうへにうかびゐていろあざやけき落
葉もみぢ葉

片寄りに青みをなせる岩溪の浅處にかぶ落葉も
みぢ葉

こがらしの風ぎぬるあとを夕焼す溪に落葉のうか
び流れて

昔むさぬこの荒溪の岩にゐて啼くいしたたきあは
れなるかも

高き橋此處にかかれりせまり合ふ岩山の峽のせま
りどころに

いま渡る橋はみじかし山峽の迫りきはまれる此處
にかかりて

古りし欄干ほとほとわがうちたたき渡りゆくか
もこの古橋を

いとほしきおもひこそ湧け岩山の峽にかかれるこ
の古橋に

落葉と龍膽花

つづらをりはるけき山路登るとて路に見てゆくり
んだうの花

うららかに峰は晴れたれわが登る山そばみちの路
のゆくてに

踏みゆくよ上はかわきて下しめる山そばみちの深
き落葉を

なかにありてくれなゐ深きこの落葉かへてにぞあ
る踏み踏みてゆくに

散れる葉のもみぢの色はまだ褪せず埋めてぞをる
りんだうの花を

さびしきよ落葉がくれに咲きてをる深山りんだう
の濃むらさきの花

摘みとりて見ればいよいよ紫のいろの澄みたるり
んだうの花

越ゆる人まれにしあれば石出でて荒き山路のりん
だうの花

笹原の笹の葉かけに咲き出でて色あはつけきりんだうの花

雪の歌

十月十九日上野國吾妻郡花敷温泉といふに宿り翌朝出立す夜のほどにあたりの山に雪の降り積みたれば詠める。

ひと夜寝てわが立ちいづる山かけのいで湯の村に雪ふりにけり

起き出でてみるあかつきの裏山の紅葉の山に雪ふりにけり

朝立ちの足もと暗し迫り合ふ峽間の路にはだら雪積み

上野と越後の國のさかひなる峰の高きに雪ふりにけり

今朝みるや峰峰かけてはだらかに雪ぞ降りたる初雪ならし

初雪にこの雪あらしあざやかに紅葉の山に降り積
みにけり

はだらかに雪の見ゆるは檜の森の茂れる山に降れ
る故にぞ

檜の森の黒木の山にうすらかに降りぬる雪は寒け
にし見ゆ

遠山の峰なる雪に天雲の影落つる見え寒けかりけ
り

鳴鳥の歌

上野の國より下野の國へ越えむとて片品川の水源林を
過ぐ。

下草の笹のしげみの光りゐてならび寒けき冬木立
かも

あきらけく日の射しとほる冬木立木木とりどりに
色さび立てり

時知らず此處に生ひ立ち鋼なす老木をみればなつ
かしきかも

散りつもる落葉がなかに立つ岩の苔枯れはてて雪
のごとみゆ

わが過ぐる落葉の森の木がくれに白根が嶽の岩山
は見ゆ

遅れたる楓一もと照るばかりもみぢしてをり冬木
がなかに

枯木なす冬木のはやし行きゆきてゆきあへる紅葉
にこころ躍らす

この澤をとりかこみなす樅梅の黒木の山のながめ
寒けき

簞ゆるは樅梅の木古りはてし黒木の山ぞ墨色に
みゆ

墨色にすめる黒木のとほ山にはだらに白き白樺な
らむ

山上に沼あり、大尻沼といふ、折から鴨の鳥あまた浮べる
を見て。

登り來しこの山あひに沼ありて美しきかも鴨の鳥
浮けり

縦黒檜黒木の山のかこみあひて眞澄める沼にあそ
ぶ鴨鳥

見て立てるわれには怯ぢず羽根つらね浮きてあそ
べる鴨鳥の群

岸邊なる枯草しきてみてをるやまひ立ちもせぬ鴨
鳥の群を

羽根つらね浮べる鴨をうつくしと静けしと見つつ
ころかなしも

山の木に風騒ぎつつ山かけの沼の廣みに鴨のあそ
べり

浮草の流らふごとくひと群の鴨鳥浮けり沼の廣み
に

鴨居りて水の面あかるき山かけの沼のさなかに水
鏡よるみゆ

水鏡よる沼のさなかにうかびゐて静かなるかも鴨
鳥の群

おほよそに風に流れてうかびたる鴨鳥の群を見つ
つかなしも

風立てば沼の隈回のかたよりに寄りてあそべり鴨
鳥の群

沼の岸全帯に石楠木生ひしげれり、おほく二三間の高さ
に及ぶ老木なり。

沼の縁におほよそ葦の生ふごと此處に茂れり石
楠木の木は

沼のへりの石楠木咲かむ水無月にまた見に来むぞ
此處の沼見に

また来むとおもひつつさびしいそがしきくらしの
なかをいつ出でて来む

天地のいみじきながめに逢ふ時しわが持ついのち
かなしかりけり

日あたりにをりていこへど山の上の凍いちじるし
今は行きなむ

中禪寺湖にて

裏山に雪の來ぬると湖岸の百木のもみぢ散りいそ
ぐかも

見はるかす四方の黒木の峰澄みてこの湖岸のもみ
ぢ照るなり

みづうみを圍める四方の山脈の黒木の森は冬さび
にけり

下照るや湖邊の道に並木なす百木のもみぢ水にか
がよひ

舟うけて漕ぐ人も見ゆみづうみの岸邊のもみぢ照
り句ふ日を

みづらみの照り澄むけふの秋の空に散りて別るる
白雲のみゆ

とりどりの紅葉散りくるなかにはなの木といへる紅葉
は色淡くして柔かなり、乃ち戯れて詠める。

はなの木の紅葉より濃き錦木のもみぢをよしと誰
も云はななくに

鳴蟲山の鹿

鳴蟲山は大谷川を距てて女峯山男體山に向ふ、折々その
山にて鹿の鳴くを聞く事ありと友の言へるを聞きて。

聞きのよき鳴蟲山はうばたまの黒髪山に向ふまろ
山

鹿のゐていまも鳴くとふ下野の鳴蟲山の峰のまど
かさ

友が指す鳴蟲山のまどかなる峰のもみぢは時過ぎ
てみゆ

も 枯草の荒野につづくいただきの鳴蟲山の紅葉乏し

今にして獵とどめずば美しき鹿が歩みを其處に見
ずならむ

茸狩に行きて得狩らずかへるさのゆふ闇に鹿を聞
きいでしとふ

夜ふけて鳴くといへれどをそごとぞ暮れ方にただ
鹿はなくとふ

二聲をつづけてあとをなかぬとふその鹿の聲をわ
れもききたし

飲食其他

いつしらず飲食のことに心つかふわれのいのちと
なりてゐにけり

いまは早やただにうましと食ひはせて命つよめむ
こと圖るあはれ

飲^のむ酒^{さけ}を止^やめなばこの身^み強^{つよ}くならむとおもふこ
ろかなしかりけり

われに若^もしこの酒^{さけ}断^たば身^みはただに生^いけるむくろ
となりて生^いくらむ

寂^{さび}しみて生^いけるいのちのただひとつの道^{みち}づれとこ
そ酒^{さけ}をおもふに

とりどりに色^{いろ}うつくしく並^なびたれこの魚^{さかな}屋^やが籠^{かご}の
うちのもの

いきのよき鳥^い賊^{ぞく}はさしみに咲^さく花^{はな}のさくら色^{いろ}の鯛^{たう}
はつゆにかもせむ

嚼^かみしむるものあぢはひわが肝^{きん}にこたへてうま
しよき日^ひぞ今日^{けふ}は

日^ひに三^みたびそのひとたびに食^くふものに量^{はか}りをおき
て物^{もの}食^くふあはれ

すさまじくむさぼりくらふ子^こ等^らがさまを嫉^あましく
父^{ちち}はながめをるなり

貧しくも飲食のことにことかかぬわが今日の日を
よるこびとせむ

わつたちつする束の間もしづかなれおだやかなれ
と願ふころぞ

掃く間なき此頃の部屋のちりほこりを立てじとわ
れの起居するなり

隙間よりもれゐて細き冬の日ざしをやごとなきも
のに眺めこそをれ

部屋にさす日ざしにまへる微塵にも静けきころ
湧ける今日なり

物書ける机のそばの窓ガラスの冬の日ざしに居る
蠅の蟲

夜もいねてただに爲事をつづくればえならぬもの
におもふ炭火ぞ

沸きおそきこの湯を待てば寒き夜の夜爲事のあひ
に頭痛めり

枕許まくらもとにかならず置おきて寝ねるくせとなりぬる時とき計けいあ
はれなるかも

貧まいしくて時ときを惜なしめば命いのちさへみじかきものに思おもひ
なざるれ

命を惜しむ歌

水みづ汲くむと井戸いどよりみれば散ちりしける庭にわの落葉おちばに霜しも
の明あるさ

衰おとろふるいのちとどむと朝あさ朝あさをとく起たきいでて水みづ浴あ
ぶるあはれ

身みを強つめむねがひを持もちてわが浴あぶる水みづのひびき
ぞ身みにこたふなる

寒かんの水みづに身みはこほれども浴あび浴あぶるひびきにこた
へ力ちから湧わき來きたる

浴あび浴あぶる水みづ身みにしみて血ちのいろのあざやけさお
のが肌はだとなりたれ

浴び浴びてわが立ちたれば身體よりしたたる水の
湯氣たつるなり

水はもよ豊かにしあれ浴び浴びてなほゆたゆたに
餘らむがほど

明るしとすなはち思ふ寒の水を浴びはてし時のわ
れのころを

水あびて眉にしたたる雫みればわがたましひも澄
む心地すれ

朝ごとに垢あらひおとしあからひくおのが身體を
見るはたのしき

鋭心ぞおのづといづる寒の水浴びはててわが起ち
あがるとき

物怯ぢを子等がするごとわれとわがいのちを持て
るあはれなりけり

散れる葉のいろあざやけき冬風ぎのあかるき庭に
立てばたのしも

やがていま梅の咲かむとおもふころをすがれて菊
の花咲きてゐる

日の色を含み散り敷く枯松葉のあたらしき葉ぞ庭
の霜の上に

冬 風

窓にさす午後の日ざしに心うきて立ちいづる庭に
みそさざい鳴く

すがれつつなほ咲く菊の根がたなる枯葉のかけに
みそさざい鳴く

すがれ咲く菊よりとびてみそさざい梅の枯枝にあ
らはなりけり

さしかはす櫻の枝の冬さびにうすあかねさせりけ
ふ出でてみれば

門さきの麥田のつちは乾きたりこの冬風のつづく
日和に

いちはやく箱根の山のすがれ野を焼ける煙見ゆ今
日の風けるに

冬なきに出ててわがみる富士の嶺の高嶺の深雪か
すみたるかも

草枯れし畦みちをゆくわがむすめくれなるの帯を
結びたるかも

友をおもふ歌

知れる人みななつかしくなりきたるこのたまゆら
のかなしかりけり

いま来よと云ひ告げやらば爲し難き事をして來む
友をしぞおもふ

をち方に離りゐる友をおもふ時かがやく珠をおも
ひこそすれ

何事のあるとなけれど逢はざればこころはかわく
逢はざらめやも

逢^あひてただ微笑^{ほほえみ}みかはしうなづかば足^たりむ逢^あひなり
逢^あはざらめやも

寂^{さび}しきに耐^たへて彼^かをりさびしきにたへてわれをり
逢^あはざらめやも

あやふかるいのちを^もちておのもおのも生^いきこら
へたり逢^あはざらめやも

自^しが肝^{かん}をみづからくらふときめきを彼^かとあふ時^{とき}し
つねにしおぼゆ

戀^こひ戀^こふる銳^と心^{こころ}もてり彼^かも持^もてり逢^あはずしあらば
錆^さびかはつらむ

寂^{さび}しさにおのおの耐^たへて在^あり經^へつついつか終^はりと
ならむとすらむ

行^ゆき逢^あひて別^{わか}れ去^さりしかいつしかに影^{かげ}もわかたず
なりし友^{とも}おほし

山櫻の歌終



◀ 歌 の 櫻 山 ▶

大正十二年五月十一日印刷
大正十二年五月十七日發行

(定價貳圓)

著作者

若山牧水

發行者

佐藤義亮

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替換

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

若山牧水著

くろ土

歌集

増版中

價貳圓參拾錢
送料拾貳錢

大正七年より九年末までの作一千首を収む。これに次ぐものは即ち『山櫻の歌』也。『山櫻の歌』と併せ誦すべきものたり。

若山牧水集

第十三版

價壹圓貳拾錢
送料拾錢

歌集

處女歌集『海の聲』より『朝の歌』までの九歌集につき一千首を抜きて一卷となす。『くろ土』以前の著者を見る可き集也。

旅とふる郷

第六版

價五拾五錢
送料六錢

散文集

『山の變死人』『空想者の手紙』『曇り日の座談』等散文二十篇。著者の漂泊の姿を隨所に看る可し。附録に『旅の歌』百首あり。

新潮出版社

